

①徳島大学 大村和人

「語りの表現から見た梁簡文帝蕭綱の詩風—「新成安樂宮」を中心に—」

南朝梁の簡文帝蕭綱は当時における艶詩流行の領袖として知られるが、彼の作品の中に「新成安樂宮」という楽府があり、『玉臺新詠』に収録されている。この作品は五言六句で、語り手が雲霧の中に見え隠れする安樂宮のごく一部を描写し、末二句で「音楽が聞こえてくる場所をお知りになりたければ、安樂宮へとお越してください」と述べ、読者をそこに誘う。

この宮殿が梁都に存在したという記録は無いが、『文選』李善注はある作品の注で「古新成安樂宮辭」の断片を引用する。このことから「新成安樂宮辭」という作品がかつて存在したことを窺い知ることはできるが、完全な古辞や蕭綱以前の模擬作品は現存していないため、彼のこの作品がその直系の模擬作品であるかどうかは判断のしようがない。従って、我々は現存する彼の作品を分析することしかできない。

蕭綱らの艶詩の特徴の一つとして描写が精緻である点が挙げられるが、この作品で宮殿や音楽演奏の描写は抑制されている。更に、作品の末尾で読者を宮殿に誘う点が注意を引く。その末尾の誘いのことばを導き出すのが、第五句の「～を知りたければ（欲知～）」という表現である。文学作品では語りも作品の要素の一つであるが、本研究はこの「欲知」という語りの表現に注目する。

「欲知」は散文において特に珍しい表現ではないが、使われる場面はある程度定まっているようである。現存する先秦漢魏晉南北朝詩の中でこの表現は晋宋時代に生まれたとされる呉歌から見え始め、斉梁時代の文人の作品で多用された。中でもこれは蕭綱とその文学集団の詩人に好まれたようであり、彼らの詩風の特徴を探る上で興味深い表現である。本研究では「欲知」の先行例を分析および分類し、他の語りの表現とも比較しながら、蕭綱の上記の作品だけでなく、彼およびその文学集団の詩風の一端を探りたい。

②東北大学大学院 潘宗悟

「孫呉の対魏晋前線における都督区について——軍事戦略との関係を中心に——」

都督区とは、都督の管轄する軍事区画である。孫権が年号を建てて曹魏から独立した黄武元年（222）から、滅亡する天紀四年（280）まで、孫呉は巫山より東の長江水路を占拠し、荊州・揚州の大部分を占有し、曹魏・西晋と対峙していた。孫呉は、主に対魏晋前線である長江沿岸の軍事要塞に都督区を設置したが（「要塞都督区」、さらに長江沿岸に帯状の「縁江都督区」を設置し、それら複数の要塞都督区を管轄させることもあった。

先学は、孫呉の対魏晋前線都督区の役割は、攻撃ではなく、長江という防衛線を守ることであったとする。中でも、孫呉の旧都である武昌一帯の縁江都督区を管轄する武昌都督の権力が大きいため、それを制限するために後に武昌都督区が左右両部に細分化されたと

する。しかし、史料上では、孫呉のそれら前線都督区の都督が魏晋に対して攻撃を行ったという記事がしばしば見られる。また、武昌都督についても、その直接的な根拠となる史料は見られない。また、孫呉と対抗していた魏晋の対呉前線都督区の都督は、孫呉に対する侵攻を担当しており、さらに、魏晋の前線都督区もまた細分化されることもあったが、その理由は都督の権力を制限するためではなく、呉蜀を征服するための軍事戦略によるものであった。従って、孫呉の都督区の細分化も、軍事戦略上の役割という側面から、その理由を検討する必要があるのではなかろうか。

そこで、本発表では以上の問題点を踏まえて、孫呉の対魏晋前線における都督区の役割に注目し、魏晋の前線都督区との比較により、その軍事戦略との関係を検討する。孫呉の都督区の軍事史上の意義を明らかにするためにも、その時々の変局の変化・権力者の交替によって変動する孫呉の軍事戦略との関係を検討する必要があると思われる。そして、それを解明することは、後に孫呉と同様に江南地区を中心として建国され、軍事地理的に大いに共通点のある東晋の都督区の性格の解明にも繋がることが期待される。